第30回保存フォーラム

地域史料の防災対策
ー埼玉県内の取り組みを中心にー

２０１９．１２．１９

於：国立国会図書館　東京本館

埼玉県立歴史と民俗の博物館
学芸主幹　新井浩文

はじめに

- 東日本大震災後、埼玉県内でも災害対策が急務となる。埼玉県内の3団体による研修会の開始⇒埼玉県文化財保護協会・博物館連絡協議会・埼玉県地域史料保存活用連絡協議会(略称「埼史協」)による研修会を開催
- 埼史協では7次専門研発足と『地域史料の防災対策』刊行
- さらに第8次専門研にて県内自治体史編さん時に収集・調査した古文書の所在確認調査を実施、報告書を刊行
- 本報告では、埼史協の活動を中心に報告します。

◆埼玉県地域史料保存活用連絡協議会の刊行物

№ 書 名　刊行年　　活動年度

第1 次『地域文書館の設立に向けて』昭和62 年（1987）
昭和60～61 年度

第2 次地域文書館の設立に向けて2『行政文書の収集と整理』平成元年（1989）
昭和62～63 年度

第3 次地域文書館の設立に向けて3『緒家文書の収集と整理』平成4 年1992）
平成元年～3 年度

第4 次地域文書館の設立に向けて4『地域史料の保存と管理』平成6 年1994）
平成4 年～5 年度

第5 次地域文書館の設立に向けて5『地域史料の検索と活用』平成10 年（1998）
平成7 年～9 年度　※韓国語版発行される

第6 次『歴史的公文書収集の現状と評価選別』平成21 年（2009）
平成19 年～20 年度

第7次『地域史料の防災対策』平成26年（2014）
平成24年～25年度

第8次『自治体史編さん以降の地域史料管理』平成30年（2018）
平成28年～29年度

日本語版（上段）・韓国語版（下段）

埼史協防災対策のあゆみ①

- 平成4年（1992）12月17日、草加市の古文書所蔵宅で火災発生→焼け残って水浸しになった古文書の真空凍結乾燥による保存処理を全国で初めて実施
- 埼玉県埋蔵文化財センターにおいて真空凍結処理を行う

埼史協防災対策のあゆみ②

- 平成7年（1995）1月17日、阪神淡路大震災起こる→埼史協でも対応策が求められる
- 「阪神淡路大震災文化財等救済募金」活動の実施→3月3日付で会員に呼びかけ
- 一部有志による「阪神淡路大震災文化財等救援委員会」のレスキュー活動に参加
- 災害対策に関する総会講演会の実施→平成7年度は小川雄二郎氏（「史料保存施設における防災対策」）、平成8年度は田良島哲氏（「阪神淡路大震災における文化財等の救援活動」）

埼史協防災対策のあゆみ③

- 平成7年（1995）7月30日、庄和町（現春日部市）において古文書所蔵個人宅が火災、被災古文書の救出が急務となる
- 8月2日に文書館職員と埼史協の被災地周辺地区メンバーを中心に救助隊を編成し、冷凍保存による救助を実施→2年前の草加の体験事例が活きる→前回同様に県埋文センターの真空凍結乾燥器によって処理

埼史協防災対策のあゆみ④

- 平成8年（1996）「地域史料保存箱」の開発
→埼史協のオリジナル保存用品
→平成9年施行「地域史料保存箱頒布及び災害備蓄用保存箱管理要項」により、災害時には全国へ無償提供するほか、県内4カ所に分散保管中
- 平成9年度秋田県本荘市へ30箱、平成11年度青森県八戸市へ20箱それぞれ提供

埼史協防災対策のあゆみ⑤

- 平成16年（2004）10月23日発生、新潟県中越地震への対応
- 募金活動→新潟県歴史資料救済ネットワークへの活動資金呼びかけ
- 救援物資の送付→新潟県歴史博物館へ地域史料保存箱100箱を提供。山古志村の史料搬送に使用
- 平成17年度総会記念講演会実施、中川浩宣氏「災害と資料保存」による小千谷や十日町などでの救済活動報告（『会報』32号）

埼史協防災対策のあゆみ⑥

- 平成23年（2011）3月11日、東日本大震災発生に対する対応
- 会員への被害調査アンケートの実施
- 水濡れ文書救済研修会の実施
- 文化財レスキュー作業への参加呼びかけ
→釜石市被災行政文書の救出作業
- 救援物資の提供→岩手県立博物館へ地域史料保存箱300箱、陸前高田市へ吸水ペーパーキット500セット

埼史協防災のあゆみ⑦

- 平成２４年度には釜石市において被災公文書クリーニング作業研修会の開催
- 第7次専門研究委員会の発足
  →アンケートの作成
  →各種災害マニュアルの作成

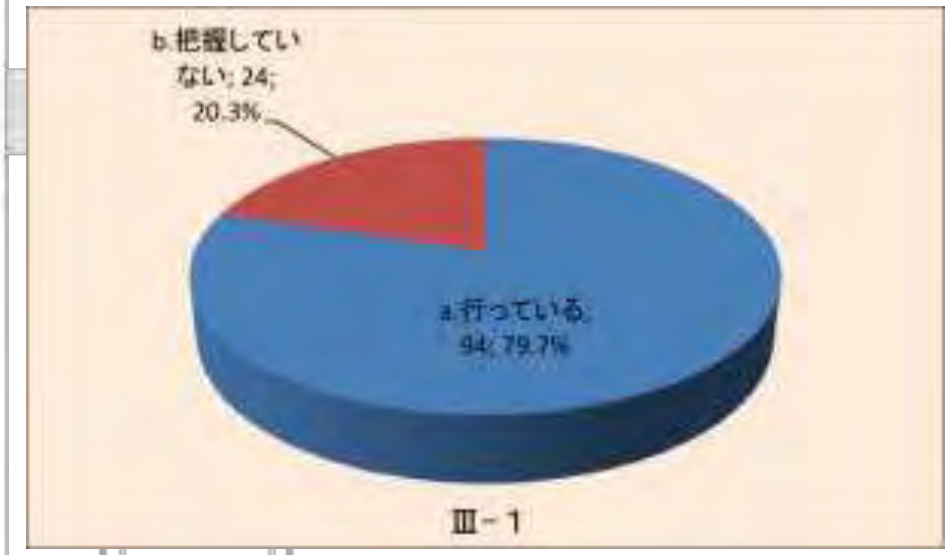
埼史協防災のあゆみ⑧

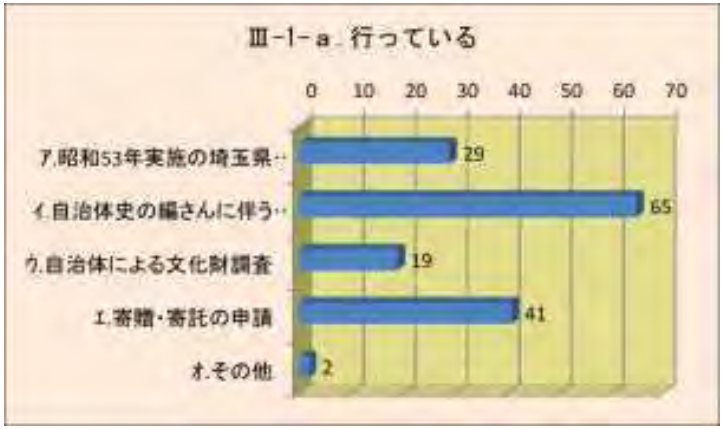
- 平成２５年（２０１３）９月２日、大規模な竜巻がさいたま市、越谷市～松伏町にかけて発生
- 同年９月１６日、行田市と熊谷市にも発生
- 専門研究委員による現地調査の実施

アンケートからみる防災対策と課題

- 第7次専門研で平成25年1月に実施
- 対象は、埼史協会員および全史料協機関会員の計162機関
- 「日常部分」と「非日常部分（災害時）」に分けて設問
- 回答率は、埼史協が100％、全史料協機関会員が83．3％

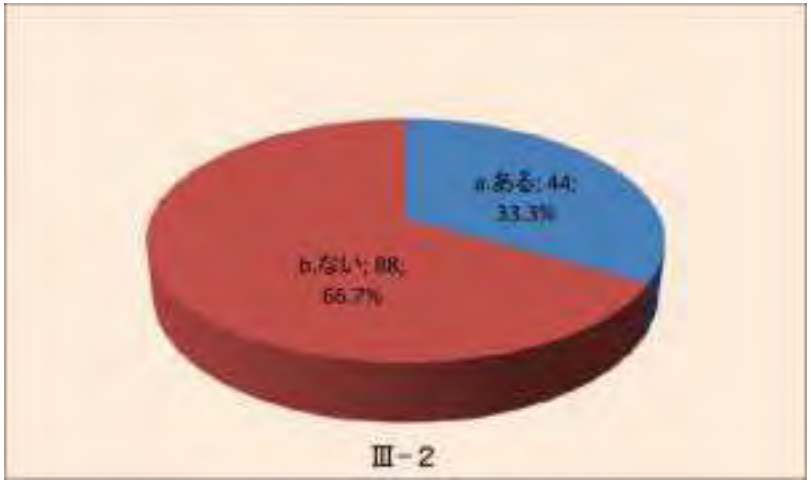
古文書の所在確認状況



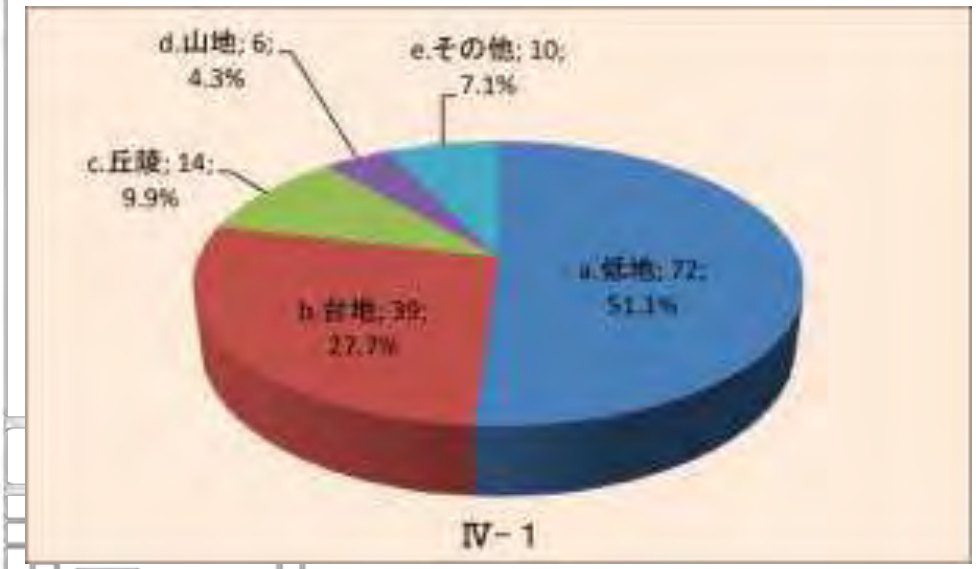


古文書の所在確認調査実施の有無

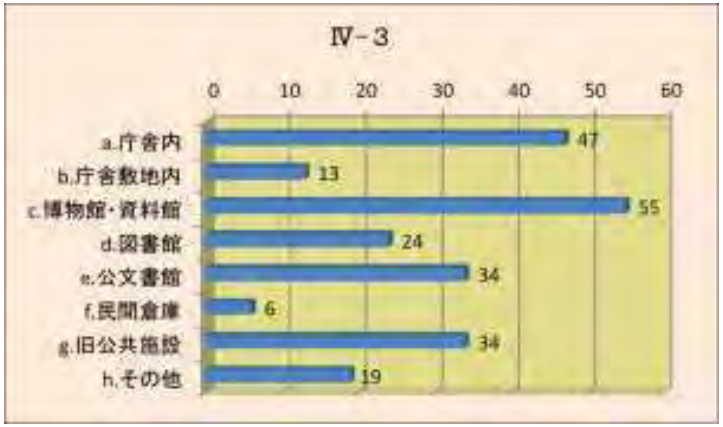
古文書所在目録の有無



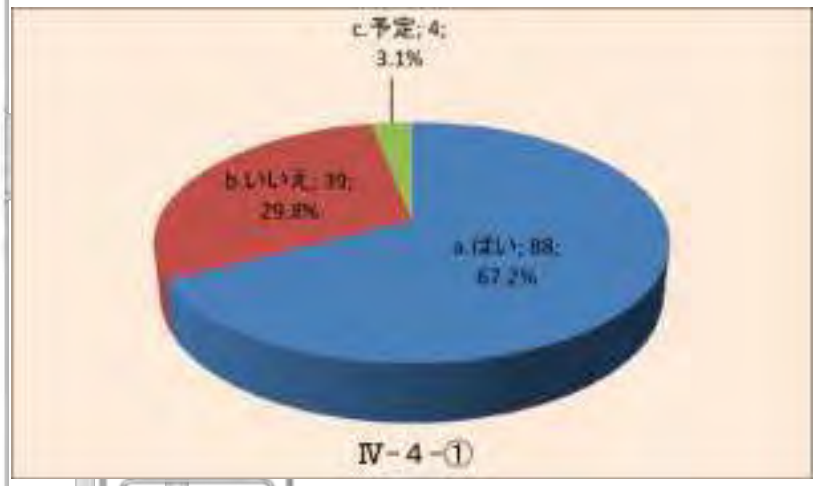
保存施設の立地と施設

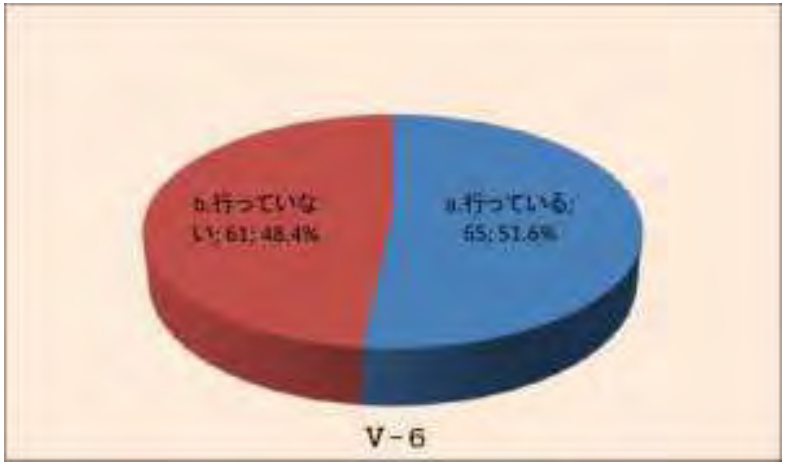

d.山地; 6; 4.3%
e.その他; 10; 7.1%
c.丘陵; 14; 9.9%
a.低地; 72; 51.1%
b.台地; 39; 27.7%
Ⅳ－1

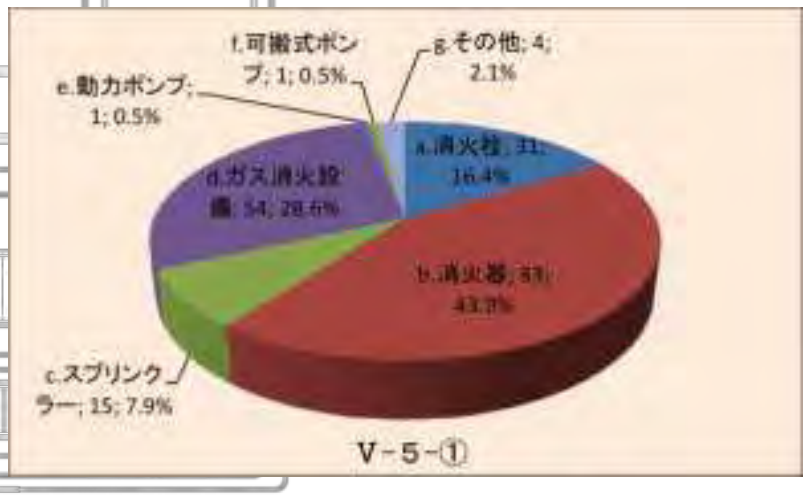
Ⅳ－2
0
20
40
60
80
100
a.住宅街 94
b.田 畑 28
c.山間部 11
d.河川の近く 39
e.海浜地帯 3
f.強風地帯 2
g.豪雨多雨地帯 2
h.豪雪地帯 3
i.その他 10

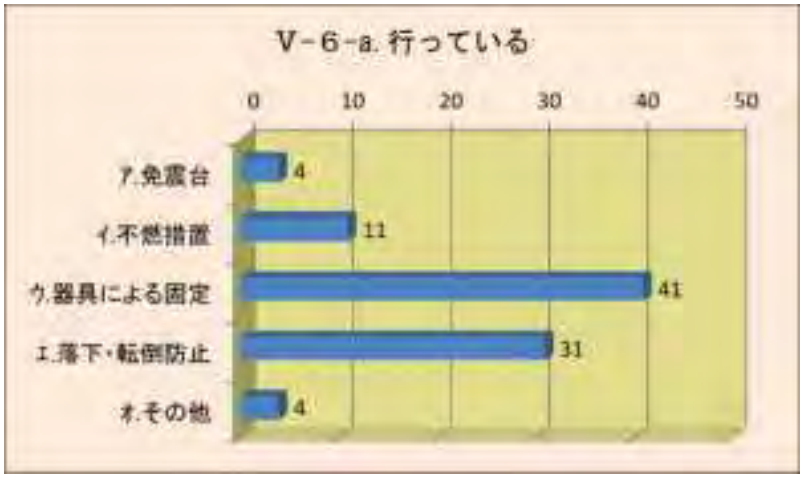

Ⅳ－3
0
10
20
30
40
50
60
a.庁舎内 47
b.庁舎敷地内 13
c.博物館・資料館 55
d.図書館 24
e.公文書館 34
f.民間倉庫 6
g.旧公共施設 34
h.その他 19

保存施設の耐震・防災設備は？

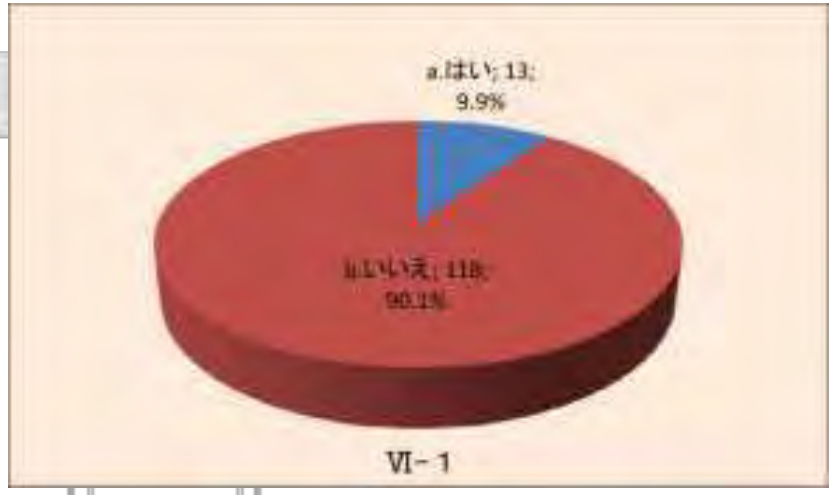


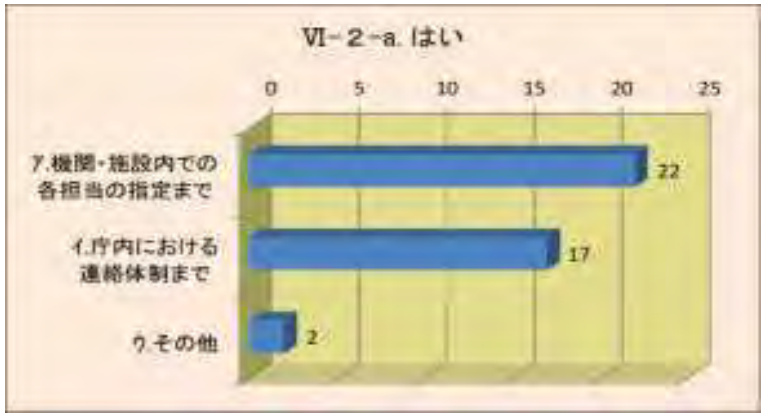


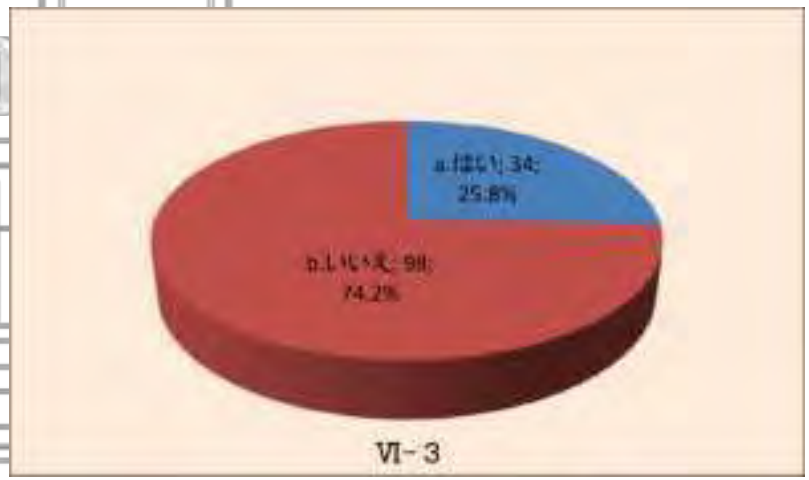


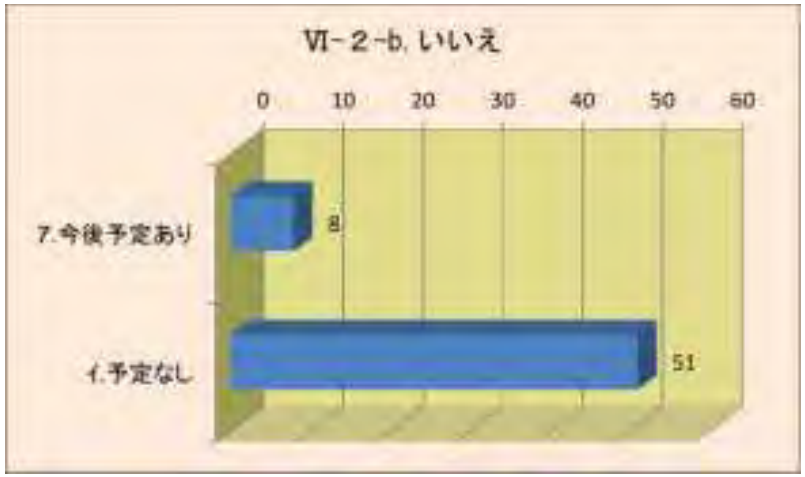


防災マニュアルの有無、他の自治体・団体・大学等との連携は？

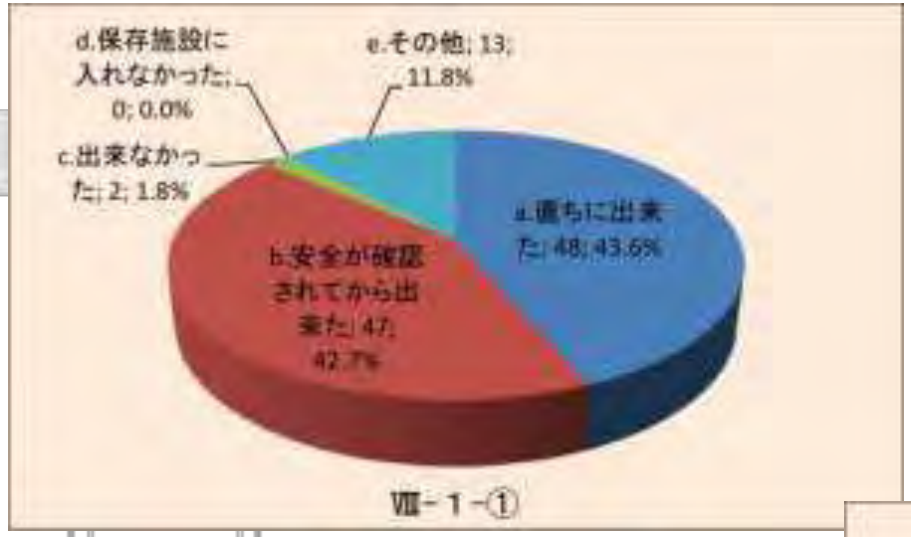




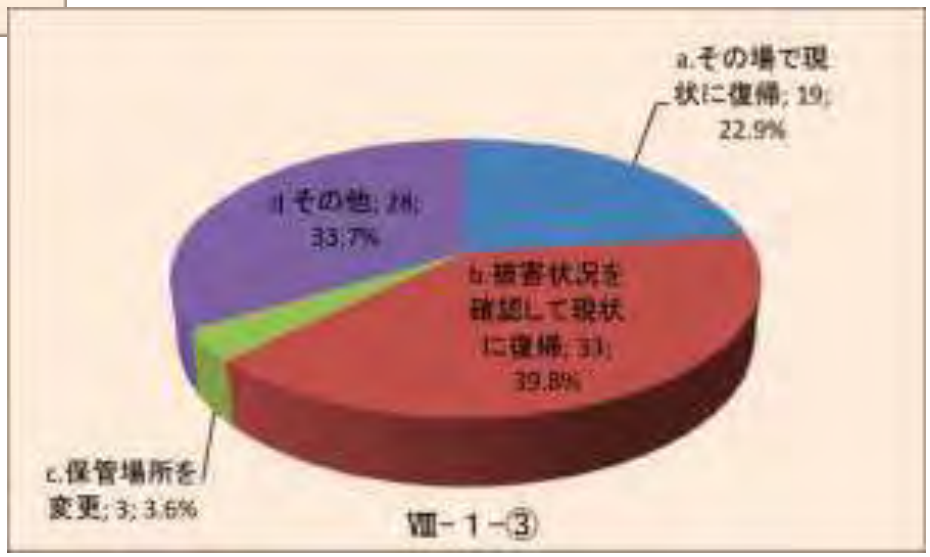




東日本大震災直後の対応は？

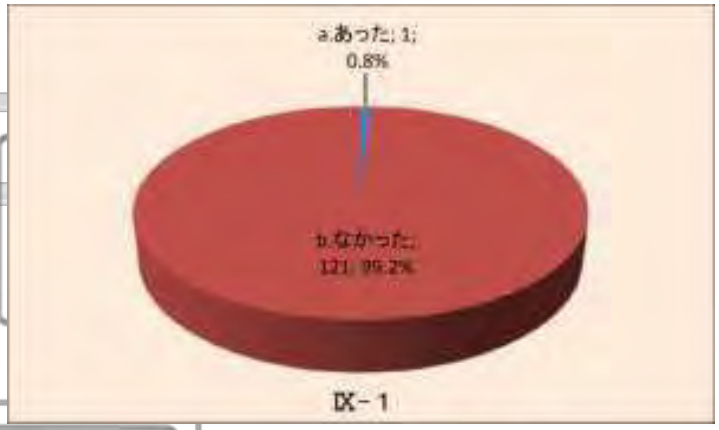


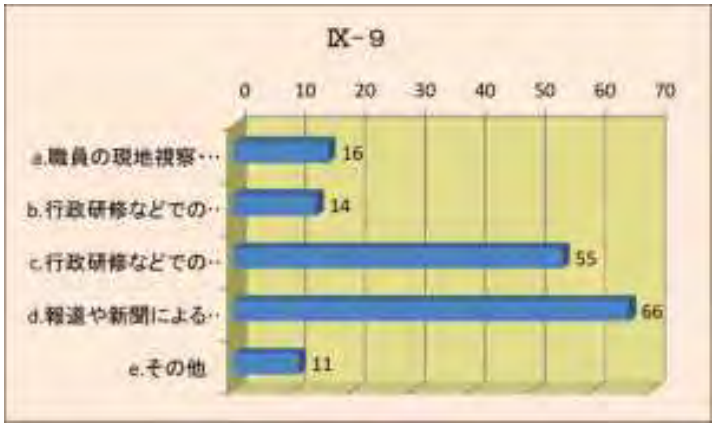
被災直後の状況確認は？



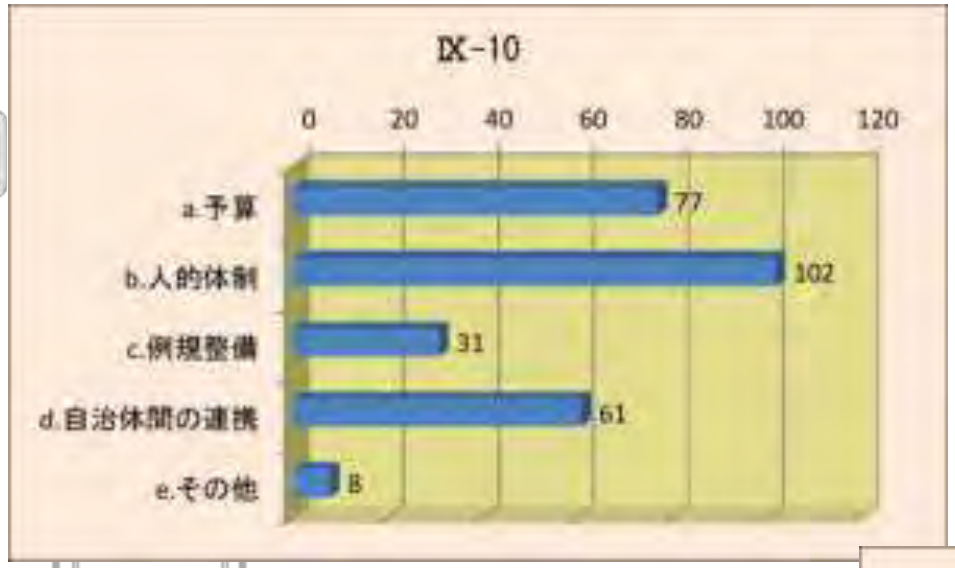
被害状況の記録は作成したか？
→ マニュアルが無い場合は、すべて現場スタッフの判断による場合が多かった。

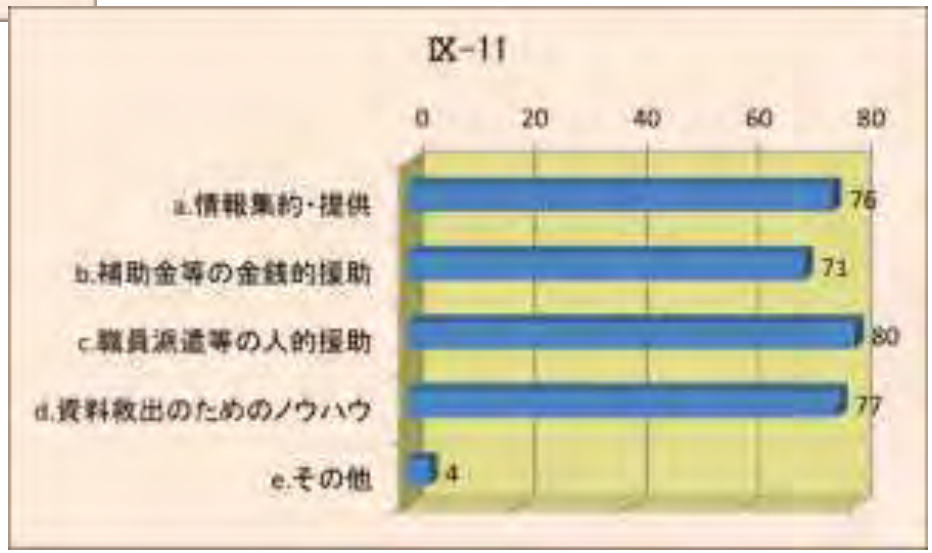
震災以前にマニュアルはあったか？

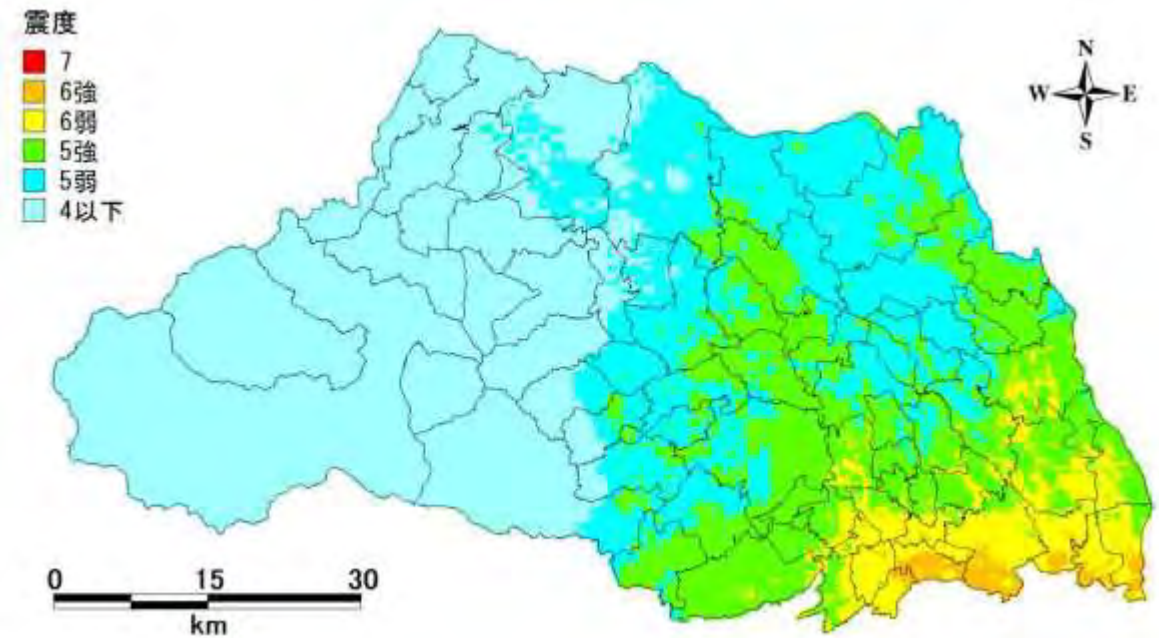




今後の対応についての課題







「東京湾北部地震　想定震度分布図」
『平成24・25年度埼玉県地震被害想定調査』埼玉県危機管理課

水濡れ文書の救済処置研修
（戸田市アーカイブズセンター）

災害初期マニュアルの必要性

- アンケート結果から見えてきた防災対策の未熟さ→阪神淡路大震災以降の経験が活かされていない？
- 必要なのは、災害時に活用できるマニュアルの作成
- これまでも「文化財防災ウィール」等幾つか存在したが・・・・・
- 埼史協が提案する災害マニュアル

＜災害対策の例（新規建設の場合）＞
〇水害対策 ・収蔵庫の配置は2 階以上にする
・窓の位置、大きさなど、雨が吹き込まないように配慮する
・消火設備（スプリンクラー）や消火活動で史料が濡れてしまわないように史料の保存方法、場所を配慮する
・給排水パイプの位置などを把握する
・施設内の漏水、水濡れ箇所のハザードマップを作成し、点検する
〇火災対策 ・火気の場所は限定し、給湯設備は電気にする
・敷地内および館内は禁煙とする
・類焼を防ぐため民家が隣接する場所は壁面となるように配置する
・耐火書庫を配置する
・防火扉、消火器などの防火設備を適切に配置する
〇地震対策 ・地質に合わせて建物の地下構造などを工夫する
・書架、棚、什器などはしっかりと固定し、ストッパーなどを付設する
・書架、棚、什器などからの史料の落下を防ぐ措置を取る
・史料は保存箱などに収納し、落下の際バラバラにならないようにする
・免震機能付書架を配置する
〇地盤沈下対策 ・ガス管の配管をせず電熱給湯のみとし、収蔵庫周辺の壁面および天井部には水道管の配管をしない

＜災害対策の例（既存施設を使用する場合）＞

〇水害対策

・可能であれば収蔵庫は2 階以上の場所を利用する

・過去に雨漏りや水漏れをした場所を把握する

・施設内の漏水、水濡れ箇所のハザードマップを作成し、点検する

〇火災対策

・火気の場所を把握しておく

・配線などが老朽化して漏電の恐れがないか確認する

・防火設備が作動するか確認する

〇地震対策

・建物の耐震構造は十分か確認し、不十分な場合は耐震工事などを行う

・壁や書架などにひび割れや傷みがないかを確認し、必要な場合は補修する

〇主に現場対応に使用するもの
スズランテープ、ビニール紐、ビニールシート、ポリエチレン袋、テープ類、タオル、史料保存箱、史料保存封筒、段ボール、発砲スチロール箱、はさみ、ピンセット、新聞紙、雑巾、懐中電灯、電池、バケツ、エタノール、霧吹き、吸水土のう、軍手、ゴム手袋、マスク など

〇主に史料退避に使用するもの
スズランテープ、ビニール紐、ポリエチレン袋、荷札（防水）、史料保存箱、史料保存封筒、段ボール、発砲スチロール箱、懐中電灯、台車、軍手、ゴム手袋、マスク

〇水濡れ文書の救済に使用するもの
キッチンペーパー（ロール状）、新聞紙、竹ベラ、ダンボール、スズランテープ、マスク、ゴム手袋（薄手）のほか、圧縮袋（座布団用）、掃除機、扇風機 など

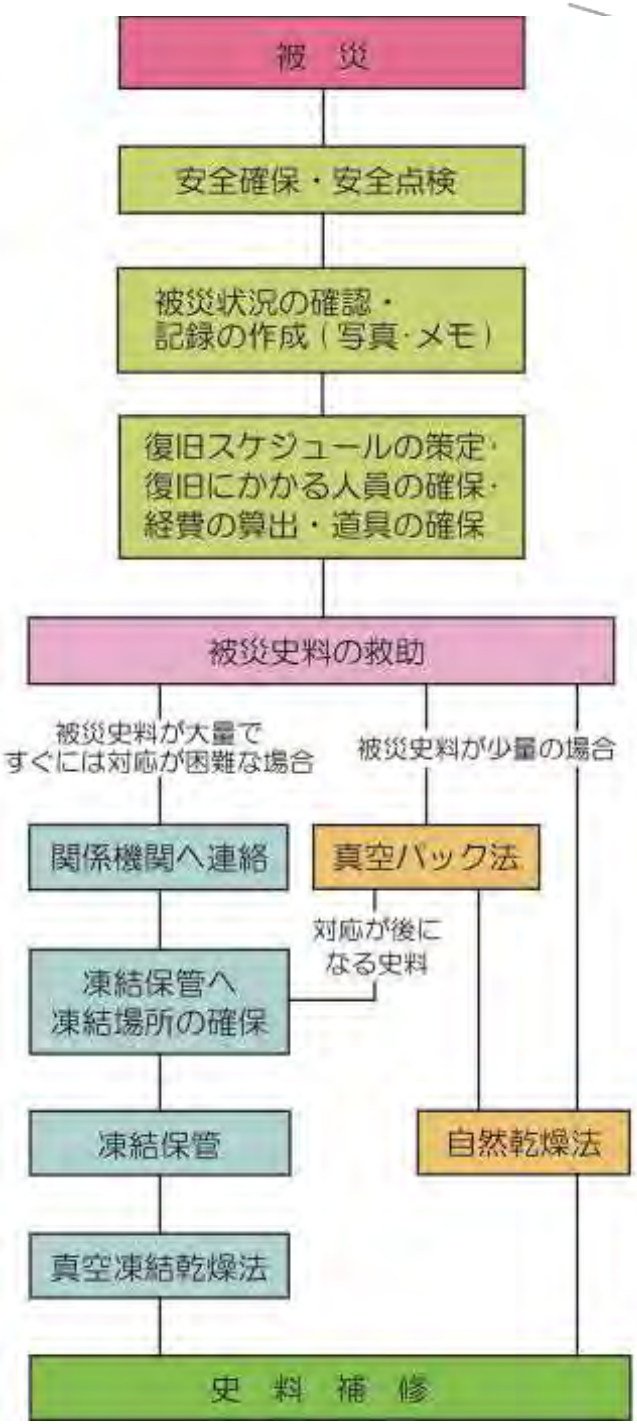
＜個人所蔵史料の救出＞

・定期的に史料所在調査をして、個人所蔵史料の状況を把握する
・マイクロフィルムやデジタルデータによる複製を作成する
・行政が寄託を受けて代理で保存する
・所蔵者との良い信頼関係を築く

＜他機関・団体との連携＞

・近隣自治体や関係機関（埼史協や全史料協など）との連携体制を整える
・地域の郷土史愛好団体やボランティアの協力を得られる体制を整える
・各自治体の文化財保護関係委員の協力を得られる体制を整える

- 水損史料のフローチャート
- 地域史料の防災チェックリスト【別紙1】
- 被災史料調査票（二種）【別紙2・3】
- 水濡れ史料の救済初期マニュアルの作成【別紙4】



水濡れ史料の救済初期マニュアル

水に濡れた史料も乾燥させれば保存することができます!!

※ここで処理対象としている資料は簿冊文書です。

◎用意するもの

【必須】
ロール状のｷｯﾁﾝﾍﾟｰﾊﾟｰ/
新聞紙 / 竹ﾍﾞﾗ/ﾀﾞﾝﾎﾞｰﾙ/
ｽｽﾞﾗﾝﾃｰﾌﾟ/ﾏｽｸ/ 薄手ｺﾞﾑ手袋
【あれば良い物】
座布団用圧縮袋 / 掃除機 / 扇風機 /ｴﾀﾉｰﾙなど

◎作業にあたっての注意事項

- 乾燥処理前の史料は、ｶﾋﾞの発生や劣化を招くおそれがあるため、天日干しやｱｲﾛﾝ･ﾄﾞﾗｲﾔｰなどの急激な乾燥は行わない。
- 水濡れ史料は無理に開かない。 開きにくい場合は、 竹ﾍﾞﾗを使う。
- 史料の端を持つと破損するおそれがあるため、 史料の真ん中を持つようにする。
- 泥など汚れたままの状態で乾燥させる。
- すでにｶﾋﾞが生えてしまった史料については、 作業前にｴﾀﾉｰﾙを噴霧し、 除菌する。

◎作業の手順

【自然乾燥法】

(1) 吸水紙の作成
①新聞紙数枚を A4 版に折る
②A4 版に折った新聞紙 をｷｯﾁﾝﾍﾟｰﾊﾟｰ3 枚 (3 枚連結した状態) でくるむ

(2) 水濡れ史料に吸水紙を挟む
①水濡れ史料の 10 数ﾍﾟｰｼﾞごと (開きそうなﾍﾟｰｼﾞ) に吸水紙を挟み込む

(3) 吸水紙を挟んだ史料の乾燥
①A4 版より 1 周り大きいﾀﾞﾝﾎﾞｰﾙをｷｯﾁﾝﾍﾟｰﾊﾟｰでくるむ
②2 枚のﾀﾞﾝﾎﾞｰﾙで表紙側と裏表紙側から水濡れ史料を挟む

③挟んだ史料をｽｽﾞﾗﾝﾃｰﾌﾟで縛って固定する
④縛った史料は圧着を防ぐために縦置きにして乾燥する
⑤吸水を見て定期的に吸水紙を替える

【真空パック法】

(4) 対応が後になる史料については、真空ﾊﾟｯｸでｶﾋﾞの進行をくい止める
①座布団用圧縮袋の吸込口を上にして袋を広げる

②自然乾燥法の手順 (3)-③で縛った資料をいくつかまとめて座布団圧縮袋の中に入れる この時、ｴﾀﾉｰﾙを噴霧することで、ｶﾋﾞの発生を予防する

③圧縮袋の口を締め吸込口に掃除機のﾎｰｽを差し込み、吸引する
④空気が入らないように吸込口からﾎｰｽを抜き、 空気が漏れないように圧着する

⑤吸水を見て定期的に吸水紙を替える
⑥状況によっては、真空凍結乾燥へ移行する必要があるため、 専門家や専門機関に連絡をとる

※③～⑤を繰り返す（カビの具合によりエタノールを噴霧する）

埼玉県地域史料保存活用連絡協議会作成

水濡れ史料の救済初期マニュアル

おわりに

- 県内団体間の防災ネットワークの重要性→埼玉県博物館連絡協議会と埼玉県文化財保護協会とのさらなる連携のほか地元大学等との連携を模索中
- 防災マップに文化財の所在地図を載せる試みを検討中→古文書所在情報との共有化＝年1回の文化財レスキューボランティア研修会の開催
- 災害備蓄用品の共有化→史料ネット等全国の他団体にも協力依頼＝災害時に全国へ！
- 課題は被災文化財レスキューボランティア組織形成(文化財防災パトロール組織との連携)